平城宮東院の調査（平城第446次）

平城宮の東院地区は奈良時代を通じて、皇太子の居所である東宮や、称徳天皇の時代の東院玉殿や光仁天皇の時代の楊梅宮などの宮殿がおかれ、儀式や宴会に利用されたことが知られています。

奈文研では2006年度から五ヵ年計画で、東院地区の重点的な発掘調査をおこなっています。今回の調査地は、中枢部の北西と推測される場所でした。調査面積は1505㎡、2009年10月1日より開始し、現在も継続中です。

調査では、建物11棟、掘立柱塀７条、溝５条、不明遺構１基を検出し、これらが６時期にわたって建て替えられたことがわかりました。これまで、西に隣接する調査区では基壇をもつ門を、南に隣接する調査区では大規模な総柱建物群を検出していました。今回の調査では、門に接続する幅約15m（50尺）の東西方向の通路を検出し、南の調査区外から引き続き大規模な総柱建物が建てられていたことがわかりました。ただし東西方向の通路は１期と６期、大規模建物群は２、３、５期と時期が異なります。また東院西北部の大規模総柱建物は、従来３期から確認されていましたが、２期にまでさかのぼることもわかりました。

さらに土地の使われ方の変遷にも特徴があります。これまでの東院中枢部の調査では５時期の変遷を確認していましたが、今回、６時期の変遷を確認しました。新しく加わった４期は、総柱建物群が形成された２、３期の後に宮殿・官衙的な建物配置をとり、その後の５期には再び総柱建物群が形成されることから、前後の土地利用が断絶する時期といえます。つまりこれまで、東院西北部を倉庫空間として理解してきましたが、今回調査においては儀式・実務の空間として利用された時期が、その間に挟まることがわかりました。この変遷の意味を、周辺調査の成果から意義づけていくことは今後の課題です。このように、６時期にわたって大規模な建物が重複しながら、ダイナミックにプランが変更されて建て替えられたことを明らかにしたことが、本調査の成果です。

今回確認された東院中枢へと延びる東西の道は、東院の全体構造解明への道ともなることでしょう。

（都城発掘調査部　鈴木 智大・国武 貞克）

第446次調査区全景（西から）